

子ども食堂と母子世帯の繋がりに関する一考察

1733022 小宮菜里奈 我謝ゼミ

要約

「こ食」という言葉からさまざまな「こ食」があることが分かり、自分が「こ食」だったことに気付く。「こ食」の経験から「孤食」は他の「こ食」を加速させるのではないかと考え、「こ食」を阻止するためには「子ども食堂」を利用すること。た、共食が難しいひとり親世帯（母子世帯）の「孤食」の割合 どうか実態を調べ、「子ども食堂」と、「母子世帯」に繋がりを調査する。具体的には、A 市 9 カ所の子ども食堂のアンケート調査、及び子ども食堂 B 代表者へのヒアリング調査を通し、子ども食堂と母子世帯の繋がりの実態を明らかにしていく。

第 1 章では、I.子ども食堂の成り立ち 困難を抱える子どもたちへの支援をする為に「子ども食堂」の活動は広がっていった。II.子ども食堂とは 農林水産省をはじめ、(a) 子供にとっての貴重な共食の機会の確保・(b)地域コミュニティの中での子供の居場所を提供等、さまざまな活動をしている。III. 母子世帯の現状 母子世帯の実態を明らかにし、母子世帯の子どもの①学力の差から貧困の連鎖が発生②孤食・偏った食事をしているということで、心身の成長を妨げていること、また食事マナーが身に付かない、学力の低下という子どもが問題明らかになった。

第 2 章では、実際に子ども食堂と母子世帯の繋がりを、居住地 A 市絞り、I.ボランティアの経験やII.流山市の子ども食堂のアンケートIII.「子ども食堂」代表の方にヒアリング調査を実施し、調査結果に基づいて一考察をしていく。I. ボランティア（参与観察）ボランティアに参加したことで、温かい雰囲気を実感し、実際の様子から、地域に暮らしている人々が「子ども食堂」のスタッフや利用者が交流することができた。また、地域の活性化に繋がると感じた。母子なのか確認が取れない 為、利用しているかは分からなかった。さらに子どもだけで利用するという姿は見られなかった。II. A 市の子ども食堂のアンケート A 市の実態を知ることで、「母子世帯」と「子ども食堂」求めるものと与えるものが一致していることが分かったが、地域の活性化に力を入れていることによって、繋がりは薄いのではないかと考えることができる。IV. A 市「子ども食堂」代表の方にヒアリングの調査 ヒアリング調査をすることでアンケート調査からでた、若い層がいないのは若いスタッフや利用者がいないという考察を裏付けられた。繋がりが薄いことが明らかになった。

第 3 章では、考察「子ども食堂」と「母子世帯」の繋がりは様々な問題がある為、提供と求めているという点は一致しているが 薄いことが分かった。今後、「子ども食堂」が「母子世帯」に特化した支援することが大事だと述べている。おわりに「子ども食堂」と「母子世帯」の繋がりを、また、どうすれば繋がりを強めることができるのか関心を持ち続けたい。